

結 章

本研究は、韓国社会において武芸が伝統文化として創られてゆく過程を考察したものである。

韓国において武芸は、文献史料や残された遺物から三国時代から行われていたことが確認される。しかし、1800年代末から始まった近代化は、それまでの武芸を時代遅れのものに転落させ、その伝承を途絶えさせる1つの原因となった。

こうした武芸が再び興ったのは、1945年に韓国が日本の植民地から独立してからである。当時の韓国は、独立はしたものの、まだ日本文化が多く残り、その清算とともに新しい韓国政府のナショナル・アイデンティティの確立が優先的課題とされた時期であった。

こうした状況は武芸にも大きな影響を及ぼした。植民地時代からすでに民間で行われていた空手は、もはや日本文化としては存在しえなくなり、空手関係者は意識を変えざるを得なくなった。その結果、実際には空手をモデルにしながらも、これに部分的変更を加えて韓国の武芸としたテコンドーを創造するに至ったのである。これによって韓国武芸のテコンドーが生まれ、日本との関わりから解放されることになった。

こうしたテコンドーの創造は、それまで存在しなかった“韓国武芸”という意識を醸成し、武芸を民族文化の表象とする最初のモデルとなった。

テコンドーの創造が担い手の個人的業績であったのに対し、テッキョンは、建国後の政府が関係している。つまり韓国のナショナル・アイデンティティを築きあげるため、政府は民間の文化を国民文化とする無形文化財の制度を整え、その1つにテッキョンが選ばれたのである。政府の認定により、武芸に伝統という言葉が結びつくことになったのである。

しかし今日、テッキョンは伝統的文化財であるべきか、競技化を目指すスポーツであるべきかという議論が起こり、韓国武芸の在り方をめぐる新しい動きが生じている。

1980年代に入ると個人による武芸の創作活動が活発化し、個性を強調して、これを売りにする新しい武芸が登場する。その1つが海東剣道であり、これは真剣を振る独特な修練法で他の武芸との差異化に成功している。そして、会員のニーズに合わせたプログラムを開発するなど、海東剣道を商品としたマクドナルド式経営によって市場を拡大している。

このように韓国の武芸の多くは、それぞれ異なった背景をもつてごく近年に創られ展開

してきた。しかし、2008年に制定された「伝統武芸振興法」によって、韓国武芸には政府が定める共通のきまりがもたらされることとなり、それによって公的な秩序と正当性が与えられることになった。

さらに「伝統武芸」という概念の導入によって、武芸が伝統や文化として扱われることになった。

これまで民間レベルで行われていた武芸は、2008年に定められた法律によって、その定められた条件に合うかぎり、韓国の伝統文化として初めて国に認定されることになった。これは韓国武芸に新しい在り方を提示するものであり、それまで瑣末であった武芸が、国の権威を背負い正当化されることになった。このように伝統という概念の中で再構築された韓国武芸は、韓国の文化や歴史、思想を表象すべく変容し、政府が認めた国民文化として展開していくことになる。